

平成23年 5 月 31 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520294

研究課題名（和文）古代の農書『ゲオーポニカ』の総合的研究とその保存

研究課題名（英文）A Study on *Geoponica* and its Saving.

研究代表者

伊藤 正 (ITO TADASHI)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：10253858

研究成果の概要（和文）：鹿児島大学所蔵の『ゲオーポニカ』をデジタルカメラに保存し、その著書全20書のうちの3書、つまり2～3書、および20書を翻訳し注釈を施した。また、その研究の一環として論文「古典期ギリシアの農業」著した。『ゲオーポニカ（第3書）』の翻訳からの成果は次の通り。古代ギリシア・ローマの農事と暦に関する多くの知見を得たこと。暦についてはラテン語の月名がギリシア語で表記されていること。農具については^{アロトウロス}犁、^{ディケッラ}鶴嘴および^{シデーロス}鉄と呼ばれる鋭利な^{ドゥレバノン}鎌が用いられていることなど。

研究成果の概要（英文）：Saving *Geoponica* by digital camera, translating and commenting three books of *Geoponica* (20 books), i.e. 2-3 and 20. And also as part of the study I wrote the article "Agriculture in classical Greek". The results of translation on *Geoponica* 3 is as follows. That got a lot of findings on the Agriculture and calendar in Ancient Greece and Rome. For calendar, Latin month names are Greek notation; For farming tools, plough, hoe and iron sickle were used, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合 計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | | | |
| 2007年度 | | | |
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 総 計 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）・西洋古典学

キーワード：ゲオーポニカ、古代の農書、古代ギリシアの農業、穀物栽培、果樹栽培、エンマールコムギ、一粒コムギ、6条オオムギ

1. 研究開始当初の背景

2006年7月鹿児島大学附属図書館で『ゲ

オーポニカ』(以下、G.と略記)と呼ばれる古代ギリシア・ローマの農業書が発見され注目

を集めた。この書物の発見の意義はきわめて大きい。まず国内唯一のものであるということは言うまでもなく、世界的にもきわめて稀な本で、その原本そのものの存在は G.の研究にとって不可欠である。本書に関する国内の研究動向およびその位置付けについて現段階で言及できるものは皆無であった。

2. 研究の目的

広く海外に目を向ければ、G.は古代ギリシア・ローマの農業関係の書物で引用され、有名なパウリーヴィッソワの『古典古代学百科辞典』の項や Oxford 版『希英辞典』の著者・著作目録一覧にそのタイトルが挙げられており、研究者の間では周知の書物であるということが出来る。しかし、海外においても、この書物の体系的な研究は少ない。これまでに私は『ギリシア古代の土地事情』(多賀出版 1999)という専門書を著わして、社会経済史的な視点から古代ギリシアの研究を続けてきた。またその研究方法として古代ギリシア語やラテン語の碑文・文献史料の読解が重要な意味を持った。G.の研究においてもこの視点とこの方法が有効性を持つであろう。

G.は 20 巻からなるが、その主な内容は次の通り。I.気象天文 II.農業一般(穀物栽培) III.農事暦 IV-V ぶどう栽培 VI-VIIIぶどう酒製造 IX.オリーブ栽培とオリーブ油製造 X-XI.造園 XII.菜園 XIII.害虫などの対策 XVI.家禽(ハトなど)の飼育 XV.養蜂、蜂蜜の製造 XVI.馬の飼育、ロバ、ラクダ XVII.牛の繁殖および飼育 XVIII.家畜の繁殖および飼育 XIX.犬の飼育、野ウサギ、鹿、豚、肉の塩付け XX.養魚と釣り。G.がこのような内容を持った古代ギリシア・ローマの農書であることを考慮に入れると、これを通して古代の農業や牧畜の実態を明らかにすることができるものと思われる。

次に、G.がどのようにして成立したか、その事情を明らかにすることである。この本のタイトルは本来『農業に関する選集』であったとされる。それはおそらく 950 年ごろビザンツ(東ローマ)皇帝コンスタンティノス 7 世 ポルピュロゲンネトスの命で編纂され、現行の形を取るようになった。当時、ビザンツ帝国は「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれる文化的潮流が見られ、古典古代の文物、とりわけ古典文献の収集およびその研究が盛んに行なわれた時代であった。G.もおそらくその国家事業の一環として編纂されたものと思われる。10 世紀の編纂者は 6 世紀の学者 Cassianus Bassus の農書を基にしてこれを編纂したとされ、さらに Cassianus Bassus は主に 4 世紀の二つの農書(Anatolius の 12 巻からなる農書と Didymos の 15 巻からなる農書)を彼の集成の底本にしたとされる。G.の各巻には紀元前 5・4 世紀から 5 世紀頃までの古代ギリシア・ローマの作家 30 名の著作の抜粋が収録されている。その中には今日散逸したものも少なくない。10 世紀の G.の種本はいったい何であったのか、その成立の事情を探究する。

もう一つは文献学的な観点からの研究である。すなわち、アパラトゥス・クリティクスの問題がそれである。10 世紀に編纂された原本はすでに失われているので、われわれはその再版本を利用するほかないが、16 世紀から 19 世紀にかけて G.の 4 つの再版本が確認されている。初版(Basel 1539)、Needham 版(Cambridge 1704)、本学図書館所蔵の Niclas 版(Lipsiae 1781)、Beckh 版(Leipzig 1895)。Niclas 版は Needham 版に負うところが大きいとされる。Needham 版は初版の多くの誤りを直している。アパラトゥス・クリティクスにおいて Niclas は Needham の成果を踏まえている。Beckh 版は以前に接する

ことのできなかったシリア版の引用によって有用性を持つ。そこで、これらの再版本すべてを文献学的に比較研究することによって、充実したアパルトゥス・クリティクスに基づく、新しい校訂本の作成と翻訳作業に従事する。

本研究の学術的な特色は西洋古典学研究および西洋古代史研究両面での成果が期待できるという点にある。しかも、このような体系的な研究は、管見の限り、世界的に見ても稀で、それだけを取ってみても重要である。いわば、この研究が嚆矢となる可能性が強く、したがって、この研究が出発点となってこの分野の解明に大きく寄与するものと考えられる。

本研究の目的は G. を用いて、(1) 古代ギリシア・ローマの農業・牧畜の実態を明らかにすること、(2) 本書がどのようにして成立したか、その成立事情を明らかにすること、

(3) 文献学的手法、とりわけ厳密なアパルトゥス・クリティクスに基づく本書の翻訳および注釈を作成すること、以上3点である。

3. 研究の方法

2008年度の研究計画・方法

2008年度は研究に先立って G. の保存に努める。本学図書館所蔵の Niclas 版(Lipsiae 1781)は 4 冊本(cviii+1274 頁)で、大きさは 22 cm×13 cmである。その内訳は次の通り。

1 冊目:序言(1-6 頁)、I-III 巻(7-262 頁)

2 冊目:IV-VIII 巻(265-562 頁)

3 冊目:IX-XII 巻(565-928 頁)

4 冊目:XIII-XX 巻(931-1274 頁)

1275 頁以降に複数の Index, Addenda および Emendanda を有す。総ページ数は 1500 頁程度。保存状態は良好であるが、本を傷めることを避けるために現物を用いての研究は慎むべきであろう。したがって、まずはデジ

タル化することによって永久保存し、各研究者の研究に貢献できるようにする。この作業にこの年度の大半が費やされた。この作業は本学図書館で行なわれた。

2009年度の研究計画・方法

2009年度は G. の研究に従事する。まずは内容の考察を行なう。この年度の研究は古代ギリシア・ローマの農書を通して古代の農業や牧畜の実態を明らかにすることが主眼である。この編纂書は 20 巻からなる。巻数表示のあとにその巻の主題がくる。主題では当該巻に含まれる内容が手短に紹介される。20 巻の内容は「研究の目的」で示した通りである。穀物栽培がぶどう・オリーブ等の果樹栽培の影に隠れて目立たないことは注目に値する。全 20 巻の章の総数は 621。621 のうちの 494 の章に、章の見出しとして当該の章で引用(抜粋)される著作名と共に属格形の著者名が併記されている。そして、以下その抜粋が続く。同じ著者が複数の章にまたがる場合は 2 度目からは「同著者の」と記される。前 5・4 世紀から 5 世紀頃までの古代ギリシア・ローマの著作家 30 名の著作の抜粋が G. の各巻に収録されている。

(1) 2009年度の大半は本書の翻訳と内容の分析を、おもに、研究室で行なった。

(2) この年度にロンドン大学へ研究調査を目的とした出張を行なった。ロンドン大学所蔵の Needham 版(Cambridge 1704)と本学図書館所蔵のものとを文献学的に比較研究することが主な目的である。

2010年度の研究計画・方法

2010年度も引き続き G. の研究に従事した。この年度の研究は主に文献学的な観点から行なわれた。16 世紀から 19 世紀にかけて G. の 4 つの再版本のうち、Beckh 版(Leipzig 1895)が京都大学に所蔵されている。さらに Beckh 版は 1994 年に Teubner から

Reprint が出ていて入手可能である。わが国に現存するすべての再版本との比較研究が可能となる。

(1) 2010年度の大半は文献学的な観点から研究が行なわれた。特に全再版本のテキスト・クリティクスを中心とした比較研究がそれである。これについては研究室で行なった。

(2) 2010年度に資料収集の目的で京都大学へ出張した。

以上、研究・調査の内容として、(1) 原書のデジタルカメラへの保存。(2) 保存が終了した部分からこの農書の翻訳・注釈の仕事を開始。(3) この農書を読むことを通してギリシア古代の農業や牧畜の実態の究明。

(4) ロンドン大学所蔵の Needham 版並びに京都大学所蔵の Beckh 版と本学図書館所蔵のものととの文献学的比較研究。

西洋古典学および西洋古代史の研究手法として古代ギリシア語やラテン語の碑文・文献史料の読解が重要な意味を持つ。G.の研究においてもこの方法が有効性を持つであろう。

4. 研究成果

鹿児島大学所蔵の『ゲオーポニカ』をデジタルカメラに保存し、その著書全20書のうちの3書、つまり2～3書、および20書を翻訳し注釈を施した。また、その研究の一環として古代ギリシアの農業に関する論文「古典期ギリシアの農業」著した。

『ゲオーポニカ (第3書)』の翻訳からの成果は次の通り。

本書は農事と暦に関する内容である。

暦について。ラテン語の月名がギリシア語で表記されている。月は12ヶ月。Ἰαννουαρίος (1月) から Δεκεμβρίος (12月) まで。特徴的な点は εἶδοι の使用である。εἶδοι はラテン語の idus に由来する。ローマの暦では3月、

5月、7月および10月の第15日目の日を idus と称し、その他の8ヶ月ではその第13日目の日を idus と称した。本書では idus を起点にしてそこから遡って何日目といった具合に日を指定している。また、月齢、すなわち月の満ち欠けの度合いによって日数を示す方法 (III.2.3;5.8) や「月が合の中にまた大地の下にあるとき」 (1.2;15.3) といった表現も見られる。その他に季節を示す言葉として、春・秋・冬の語が存在する。秋と春はそれぞれ形容詞形 μετοπωρινός, ἑαρινός (13.7;14) で現われる。冬は名詞形 χειμών (13.8) が用いられている。また、「(春・秋) 分 ἰσημερία」 (3.2;13.2) の記載がある。本書では数箇所 (13.2;7;13.10) 農事の時期を恒星の運行によって表しているところがある。言及される恒星は、プレーイアデス Πληιάδες、セイリオス Σείριος (シリウス) およびステファノス στέφανος である。本書は15章から成る。7-9章を除く各章 (1-6章と10-15章) に各月に行なわれる農事が纏めて記されている。

植物について。本書に現われる植物は樹木、穀物および豆類など58種類。すなわち、ブドウ、オリーブ、モモ、スモモ、アンズ、アーモンド、サクランボ、リンゴ、ナシ、ザクロ、ギンバイカ、イチジク、シトロネ (果樹)。ソラマメ、ラデュロス、ヤハズエンドウ、レンズマメ (豆類)。コムギ、三ヶ月コムギ、^{シタニオン}白コムギ、黒コムギ、アレクサンドレイア種コムギ、^テ一粒コムギ、エンマーコムギ、キビ、オリュラ、オオムギ、レプティティデス (穀類)。クリ、クルミ、ヤナギ、プラタナス、ニレ、^{ブテラー}榆、^{レウケー}白楊、マンナトネリコ、マツ、モミ (樹木)。ムラサキウマゴヤシ、^{キュティソス}エニシダ、アシ、シロバナルピナス、ギョウギシバ、ハネガヤ、イバラ、オシダ、スゲ、イグサ (牧草)。^{カンナビス}ゴマ、^{アマランソン}タイマ、ウスベニタチアオイ、不凋花、セロリ、ドクニンジン、

セイヨウカボチャ、アスパラガス（野菜）。バラ、ユリ（花）。ブドウにはいわゆる^{アンペロス}ブドウの木^{アナデンドラス}の他に^{ツルブドウの木}と^{カミテイス}ブドウの木^{アンペロス}がある。

農具について。農具については多くの知見を得ることはできない。^{アロトウロス}「犁」は「短い」「小さい」といった形態を示す形容詞および「深く掘ることができる」といった機能を示す形容詞をともなって現われる。犁は、言うまでもなく、土地を耕すのに用いられる農具。同じく耕作用の農具として^{ディケッラ}鶴嘴がある。もう一つ、^{シデーロス}「鉄」と呼ばれる鋭利な^{ドゥレバノン}鎌がある。ブドウの木の剪定などさまざまな用途に用いられる。

農地について。^{パラディソイ}果樹園に植えられるのはオリーブの木、アーモンドの木、サクランボの木およびすべての実をつける樹木、また^{ブデレー}榆^{レウケー}、白楊、マンナトネリコ、マツおよび^{ケーボイ}モミの木^{アマランソン}である。庭園にはセロリ、不凋花およびウスベニタチアオイを植樹することができる。さらに^{オイケイオイ}適した場所^{トボイ}にゴマ、^テ一粒^イコムギ、エンマーコムギ、キビ、および^{カンナビオン}タイマが播かれる。また、オリーブ園も存在した。耕地は、土壌の質の違いにも関わらず、一律に $\gamma\eta$ と表現されている。一度だけ牧草地 $\chi\omicron\rho\tau\omicron\kappa\omicron\pi\omicron\nu$ という表現が現われる。

穀物栽培と果樹栽培について。穀物は^{シートス}コムギとオオムギに大別される。両者を比較した場合、コムギの方が品種も多く、その栽培において優位を占めていた可能性が高い。穀物栽培と果樹栽培を比較した場合、果樹栽培にウエイトが置かれているように思われる。果樹栽培、とりわけブドウ・オリーブ栽培の場合、実（種）を播くことによる増殖はしばしば樹木を野生形態に戻すがゆえに行われなかった。果樹栽培において「植樹する $\phi\upsilon\tau\epsilon\upsilon\omega$ 」という動詞が一般に用いられているが、その意味するところは「切り枝」の挿し木、取り木、

接ぎ木及び芽接ぎ法による植樹なのである。特筆すべきは、 $\phi\upsilon\tau\omicron\rho\iota\omicron\nu$ への言及である。この語は *Gp.*が初出で、ローマの *seminarium* を示すために用いられている。*Seminarium* は *nursery of young trees* の意味である。つまり、「切り枝」は根付くまで数年間 $\phi\upsilon\tau\omicron\rho\iota\omicron\nu$ で育成され、その後元の土壌に移植される。果樹栽培、とりわけブドウ栽培における主要な農作業は剪定と木の根元の掘り返しである。剪定および木の根元の掘り返しを表わす語は本書中に複数見受けられる。剪定については、 $\kappa\lambda\alpha\delta\epsilon\iota\alpha$, $\kappa\lambda\alpha\delta\epsilon\upsilon\omega$, $\kappa\alpha\theta\alpha\iota\rho\omega$, $\acute{\epsilon}\kappa\tau\epsilon\mu\omega$, $\acute{\alpha}\rho\omicron\tau\epsilon\mu\omega$ 、木の根元の掘り返しについては、 $\sigma\kappa\acute{\alpha}\pi\tau\omega$, $\sigma\kappa\acute{\alpha}\phi\omicron\varsigma$, $\pi\epsilon\rho\iota\sigma\kappa\acute{\alpha}\pi\tau\omega$, $\acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\kappa\acute{\alpha}\pi\tau\omega$ といった語が用いられている。但し、このような用語の違いが農作業上の相違を反映しているのか否か判然としない。穀物栽培の場合、播種による増殖が基本である。播種の時期は2・3月、7月および10月である。2・3月のみは何を播くかが記されている (*Gp.* 2.4; 3.11-12)が、あとの二つの時期については、それが記されていない。しかし10月には「播種の多くが始まる (*Gp.* 10.9)」と述べられているので、この時期が播種にとって重要な時期の一つであったことは確かである。テオプラストス（『植物誌』第8巻第1章）は、三つの播種期を言及している。最初の時期はプレーイアデスの沈む頃であり、第2の時期は冬至の後で春が始まる頃、そして第3の時期はいわゆる夏である。このうち、最初の時期は本書の播種期の10月に当たり、第2の時期は2・3月に当たる。つまり、10月には冬作物の、2・3月には春作物の播種が行なわれた。穀物栽培における主要な農作業は休閑地の犁返しと緑肥のための鋤き込みである。耕地は冬作地、春作地および休閑地に分けられており、三圃式輪作が行なわれていたものと推定される。冬作地にはたくさんの品種が栽

培されているが、12月に播かれるソラマメを除いて、品種名は挙げられていない。一方、春作地では、2月に三ヶ月コムギ、ゴマおよびカンナビスタイマ、3月にシタニオン白コムギ、メラナデル黒コムギ、アレクサンドリーノスと呼ばれる長コムギ、レプティティデスと呼ばれるオオムギ、さらにゴマ、一粒コムギ、エンマーコムギ、キビ、およびカンナビオンタイマが播かれる。休閒地は数回犁返される他、シロバナルピナスが緑肥として用いられている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

伊藤正「古典期ギリシアの農業」『西洋史学論集』48号(2010) pp. 1-20. 査読有。

伊藤正『『ゲオーポニカ(第3書)』翻訳と注釈』『鹿児島大学教育学部研究紀要』48号(2010) pp. 1-20. 査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 正 (ITO TADASHI)
鹿児島大学・教育学部・教授
研究者番号：10253858